

ほう か こ ぶ 放課後カフェ部!

いっ こ ちょうあまとう
イケメン五つ子は超甘党

こがらし
凧ちの・作

つなかわ・絵



アルファポリスきずな文庫

◆ はじめてのお客さん

6

◇ うわさの十倉兄弟

15

◆ 五つ子の秘密

28

◇ 大切な思い出〜黒音side〜

39

◆ カフェ部大作戦

46

◇ 十倉兄弟に直談判

53

◆ 甘い勧誘〜黄金side〜

63

◆ 難しい交換条件

67

◇ ふたりきりの勉強会

106

◆ 十倉兄弟の過去〜白side〜

130

◇ テストの打ち上げパーティー

139

◆ トップアイドルの苦悩〜赤月side〜

174

◇ 十倉邸にお泊まり

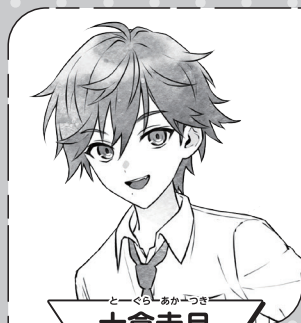
187

◆ 閉じこもっていた心〜青葉side〜

208

◇ ついにオープン!?

215



十倉赤月

アイドルグループsweet colorのメンバー。ビジュアルと歌唱力ナンバーワン！



十倉青葉

とある事情で学校をずっと休んでいる。正体は人気ゲーム実況者。



草ノ瀬一羽

咲良のクラスメイト。いつも明るくて頼りになる女の子。黒音推し。



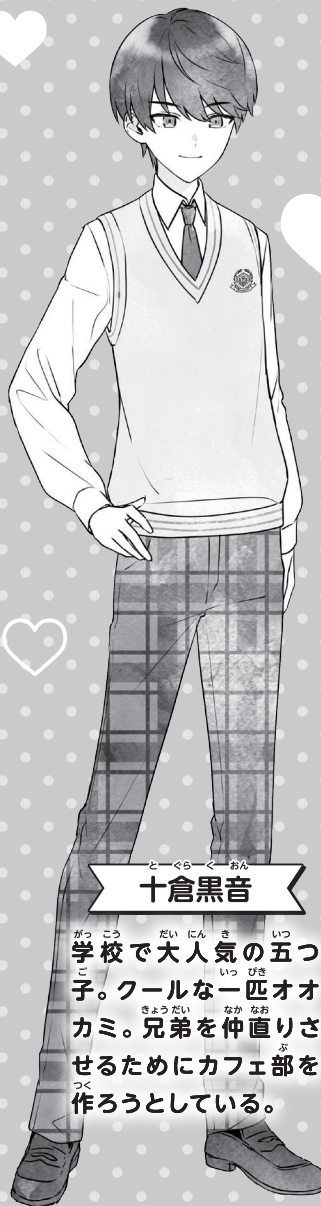
十倉白斗

成績優秀なさわやかイケメン。咲良のクラスの学級委員をつとめている。



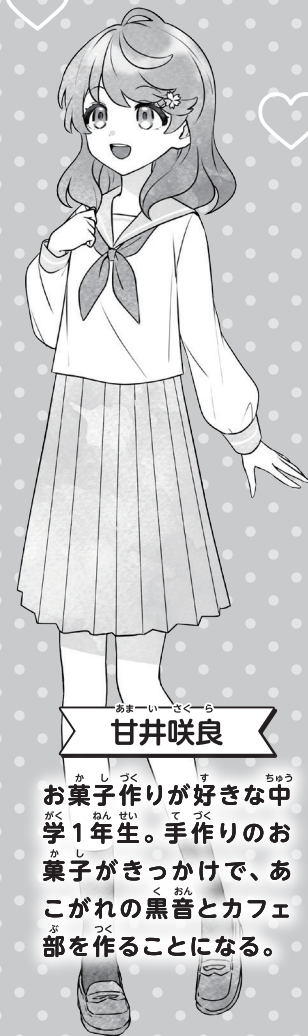
十倉黄金

SNSや雑誌で活躍するインフルエンサー。おしゃれでかわいい男の子。



十倉黒音

学校で大人気の五つ子。クールな一匹オオカミ。兄弟を仲直りさせるためにカフェ部を作ろうとしている。



甘井咲良

お菓子作りが好きな中学1年生。手作りのお菓子がきっかけで、あこがれの黒音とカフェ部を作ることになる。

登場人物紹介

はじめのお客さん

「うん、いい感じ」

オーブンを開けた瞬間、温かい空気とともにバターの甘い香りがただよう。

今まで作ってきたなかで一番と言えるくらい、きれいに焼き上がったマフィン。

天板にのったそれを、調理台の上に置く。

「おお、上手にできてるじゃないか。形がきれいなものを店に出そう」

そう言ったパパが私の頭を優しくなでる。

「うん！」

大好きなパパに褒められたのが嬉しくて、大きな声で返事をする。

すぐにパパに言われた通り、次の作業に取りかかった。

私の両親は、自宅の隣でカフェ〈あまい部屋〉を経営していて、私はよくお店の手伝いをしている。

注文を取ったり、レジの対応をしたり。

コーヒーや焼き菓子の香りに包まれるこの穏やかな空間で過ごすのは、私の大好きな時間だ。

そして、今日はこのカフェで、私の夢が一つ叶う特別な日。

パパとママの手伝いをしていくなかで、私もスイーツを作るのが好きになった。自然と、

いつか〈あまい部屋〉に私の作ったスイーツも置いてもらいたいと思いつきながら、今日まで、私史上最高にいいマフィンを作れるようにがんばってきた。

それが今日、ついに現実になる。

数量限定で、お店のサービスとして私の作ったマフィンを提供できるのだ。

家族や友達以外に自分の作ったものを食べてもらえる日がくるなんて。

喜びでにやけそうになる口元を何度もキュッと結びながら、マフィンの準備と並行して、パパとママとオーブンの準備をはじめた。

カランコローン。

「いらっしやいませー!」

オープンから十分ほどが経って、最初のお客さんが来店した。

私と同年代くらいの男の子だ。

「お好きな席へどうぞ」

彼は、カウンターにいたママに案内されると、ペコつと会釈して一番奥のテーブル席へと進む。遠目に見てもとってもスタイルがいいのがわかった。

急いでお冷を用意して、彼の席へと向かう。

「ご注文がお決まりになりましたら、お声がけください」

お冷を置きながらそう言うのと、

「アイスカフェラテ、ありますか?」

とお客さんがこちらに顔を向けて聞いてきた。

うわあ……きれいな人。

さらさらの黒髪。切れ長の目に前髪がわずかにかかっている、それがより大人っぽさを感じさせる。スツと通った鼻筋に薄い唇と、シャープな輪郭。

男の人を見てきれいだと思っただのは生まれてはじめて。

「……あの」

「はっ! すみません! アイスカフェラテですね。かしこまりました!」

危ない危ない、あまりの整った顔に思わず見惚れてしまった。仕事なんだから、集中しなきゃ!

カウンターに戻ろうと振り返ると、ママが口パクで私になにかを訴えていた。

あれは……

あ、そうか! マフィン!

あんなに楽しみにしていたのに忘れるなんて、私ってば!

再び、お客さんのほうに顔を向ける。

「お客さま、本日、数量限定でチョコチップマフィンをサービスしているんですが、いかがでしょうか?」

緊張しながらずねると、お客さんがわずかに目を見開く。

「マフィン……いいんですか?」

「はい！」

「じゃあ、お願いします」

「かしこまりました！ 少々お待ちください」

「やった！ 私のマフィンを食べてくれるはじめてのお客さんだ！」

心のなかでガッツポーズをしながら、チラッと彼に目をやると、トートバッグから**タブレットとタッチペン**を出していた。

学生さんっぽいし、勉強かな？ えらいな……私は来週、**中学の入学式**だけど、宿題がないのをいいことに全然勉強なんてしてないよ。

スマートで素敵な人だな、と思いながら、オーダーされたメニューの用意を急いだ。

最初のお客さんが来店してから二時間ほどが経ったころ。

店内は、数組のお客さんで賑わっていた。

よく来てくれる常連の老夫婦や、パソコンで作業しているスーツ姿の男性に、大学生ぐらいの女の子ふたり組。

カウンターから、お客さんたちのリラックスした雰囲気を感じて心が温かくなる。

『食べてくれる人のことを考えながら作るのよ』

昔、はじめてママとスイーツ作りをしたときに教えてもらった言葉が脳裏で響く。

料理は**真心**が大事。

私が作ったマフィンを口に運びながら、会話を楽しんでいる老夫婦や女の子たちを見てホッとする。いざ、誰かに食べてもらえるその瞬間がくるとみんなのお口に合うか不安だったから。

私の気持ちがちやんと伝わった気がして、自然と顔がほころんでいると。

「お会計、お願いします」

男の人の声がして振り返ると、最初に来店したお客さんが立っていた。

「はいっ」

あらためて見ても、やっぱり俳優やアイドルみたいに顔が整っていて、目の前にいると少し緊張してしまう。

「お会計は三百五十円です」

「……マフィン」

「へっ……」

突然、財布を開く手を止めたお客さんが、低めのトーンでつぶやいた。顔を上げると、バチッと視線が絡んだ。

この人、今、マフィンって言ったよね？ おいしくなかったとかクレームだったらどうしよう！

「あのマフィンを作ったのは、向こうにいる人？」

「え……」

お客さんは、カウンターのうしろの厨房にいるパパに視線を向けながらそう言う。ちよっぴりひるんでしまうけど、ここは正直に……

「マフィンは私が作りました。今日はじめてお店に置いてもらえることになって……」

「きみが作ったの？」

お客さんは驚いたように前のめりでそう聞いてくる。

すごくクールそうな印象だったから、その仕草が意外で、ちよつと圧倒されてしまう。

「は、はいっ」

はつきり答えると、さらに彼の表情が明るくなる。

「……すごくおいしかった」

え。

彼のほほえみがキラキラ輝いてて、息が止まった。

心臓の鼓動が速く鳴り出して、顔もだんだん熱くなっていく。

いけないいけない。

トレイに置かれたお金を受け取り、緊張と嬉しさに震えそうになる手でおつりを渡すと、

「ごちそうさまでした。また来ます」

お客さんはそう言つて、うしろを振り返つ



て出口へと向かった。

「あ、ありがとうございます！」

彼の背中を見送りながら胸に手を置くと、まだ心臓がうるさい。

まさかあんな素敵な笑顔で『おいしかった』って言ってもらえるなんて。

心を込めて作ってよかった。

私のスイーツをはじめて食べて嬉しい感想を伝えてくれたお客さん第一号。

今日のことも、彼のことも、私は絶対に忘れないだろう。

また……会いたいな。

うわさの十倉兄弟

ふわりと吹く風が桜の花びらを揺らすと、わずかに肌寒さを感じる四月上旬。

真新しい制服に袖を通した今日は、愛ノ花学園の入学式。

ダークグレーのセーラー服に、淡いピンクのスカーフ。

このやわらかくてかわいい色味の制服が昔から憧れだった。

制服を身にまとうと、自然と背筋が伸びる。

少しは中学生らしく見えているかな。

去年建て替えたばかりの校舎はピカピカで、体育館の舞台で話している校長先生も優しそう。

学校に着くまではちよつと緊張していたけど、だんだん落ち着いて、期待に胸をふくら

ませていると。

「続きまして、新入生代表挨拶。十倉白斗くん」

そんなアナウンスが体育館に響いた。

新入生代表って、学年で一番成績が優秀な子がするんだよね。

一体どんな子なんだろう、と舞台に注目していたら、男の子が舞台上がった。

その瞬間、周りが一気にざわつきはじめる。

特に……女の子たちが。

「春の息吹が感じられる今日、私たちは——」

温かみを込めて流ちょうに話す彼——十倉白斗くん。彼の整った顔つきに私も引き込まれた。

こういう代表挨拶って、いかにもまじめそうな子がやるんだと勝手に思っていたから驚いた。

色素の薄いミルクティーベージュの髪と、同じ色をした瞳。

小さな顔に長い脚。抜群にスタイルがいい。十倉くんは、テレビで見るアイドルみたいにかっこよくて、女の子たちがざわつくのも無理はない。

かっこいいと言え……

ふと、数日前の春休みにお店に来てくれた男の子のことを思い出す。彼の笑顔を思い出すと、いまだに胸がキュンとしてしまう。

大人っぽかったから同じ年ではないかもしれないけど、もし同じ学校で再会できたら素敵だなあ、なんて思う。

いや、また来るって言ってくれてたし、お店でいつか会えるよね。そう自分に言い聞かせながら、十倉くんの挨拶に意識を集中させた。

入学式を終え、張り出されたクラス表を確認して、ワクワクしながら教室に入る。

黒板に座席表が張り出されていて、自分の席に座ることができたけど……友達を作る前に、目の前の光景に固まってしまう。

教室の一番前の窓側の席にできている、ひときわ目立つ人だかり。

その真ん中には、今朝、新入生代表挨拶をしていた十倉白斗くんの姿が見えた。

そう。私は彼と同じクラスらしい。

「ラッキーだよ、あの十倉くんと同じクラスなんて」



「へっ？」

突然、真うしろから声がして振り返ると、ハーフアップのよく似合う大人っぽい女の子が笑みを浮かべていた。

「あ、私、草ノ瀬一羽。よろしくね。甘井咲良ちゃんだよ。かわいい名前の子だからクラス表見て思ってたんだ」

「え、ありがとうございます！ く、草ノ瀬さん、よろしくお願いします！」

「フフフツ、同じ年なのになんで敬語？ 一羽でいいよ。私も咲良って呼びたいし。いいかな？」

「もちろん！ よろしく、一羽ちゃん！」

ついお店の手伝いのくせで初対面の人に敬語を使ってしまうけど、一羽ちゃんがあまりにも優しくて自然と緊張が解ける。

「それにしても、十倉兄弟が全員入学してくるなんてびっくりだよ」

「え、十倉兄弟？」

あの十倉白斗くん兄弟がいるの？ と頭にはてなマークを浮かべていると、突然、廊

下がざわつきはじめた。

「赤月くん！」

「黄金くん！」

男の子の名前を呼ぶ黄色い声が響いている。

「な、何事!？」

「え、もしかして咲良、十倉兄弟知らないの？」



まさかつて表情でこちらを見る「羽ちゃんに、苦笑いすることしかできないでいると、
「羽ちゃん」は「見たほうが早い!」と私の手を掴んで教室の外へと連れ出した。

「うわあ……すごい人」

「じゃなくてあつち!」

人の多さに感心していると、一羽ちゃんに突っ込まれて、外に視線を向ける。

「え、あれって……」

目に映る人物に息をのむ。

ほ、本物!?

女の子たちの熱い視線や歓声に、慣れたように手を振って愛嬌を振りまいているのは、
大人気アイドルグループ sweetcolor のメンバー十倉赤月くん!

赤月くんは、圧倒的なビジュアルとグループいちの歌唱力で同世代の女の子たちを虜に
している。

なんでそんな国民的アイドルが、こんな都心から離れた町の学校なんかにいるの!?

そしてそんな輝かしいオーラをまとう彼から少し離れたところには、またも、まぶしい

オーラを放つ男の子。

子犬のようなクリクリした目に、ふわつと巻かれたやわらかそうな髪。
入学早々、制服をおしやれに着崩している彼は、女の子たちの髪型を褒めたりしている。
そんな彼は、SNSで人気を獲得し、ファッション雑誌に引っぱりだこのモデル、**黄金**
くんだ。

最近ではファッションやメイク関連の動画を投稿していて、チャンネル開設一か月で、**登録者数百万人**を突破していた。

そんな今をときめくふたりが、どうして……

まさか、今一番注目されている**芸能人**や**インフルエンサー**と同じ学校に通うなんて……
「赤月くんと黄金くんが兄弟ってことは、界限では結構有名な話よ」

「そ、そうなの!？」

横から一羽ちゃんが耳打ちしてくれた内容にびつくりする。

有名人のふたりが実は兄弟って……

全然知らなかったよ。

同じ学年ってことは、双子!?

「今日、新入生代表挨拶をした十倉白斗くんも、彼らの兄弟」

「え!? そうなの!? 一羽ちゃん、詳しいんだね……」

「いや、知らない咲良のほうがまれだよ。十倉兄弟は**五つ子**なの」

「い、五つ子!？」

「そう」

とうなずいて、一羽ちゃんが十倉兄弟のことをさらに詳しく教えてくれた。

十倉兄弟の残るふたりは、**黒音くん**、**青葉くん**という名前らしくて、青葉くんは小学校のある時期から学校に通っていないとか。そして……

「正直、私は**黒王子派**なの!」

いきなりそう言って口元を緩める一羽ちゃん。

「く、黒王子?」

「黒王子の黒音くん。彼は、さわやかイケメン王子の白斗くんとは真逆なタイプなのよ」

「は、はあ」

今まで以上に熱弁する一羽ちゃんに圧倒される。

「クールで人とあんまり関わらない一匹オオカミタイプ。媚びない、群れないっていうのかな。そういうところが大人っぽくてちょーカッコよくて！ まあ、だから仲よくなるのは難しいと思うし、観賞用ね」

「か、観賞用……すごいね、一羽ちゃん。黒音くんと同じ学校だったの？」

「ううん！ うわさよ、うわさ。十倉兄弟がうちに入学するかも、って春休みの段階から広まっていたもん」

「ええーそうなんだ……全然知らなかったよ……」

「まあ、ほとんどの人はデマだと思ってたしね。私も今まで信じてなかったよ。十倉兄弟は超お金持ちの御曹司だし、こんなところに来るわけないって。でもどうやら、十倉財閥はこの学校に多額の寄付をしているらしくて」

お、御曹司……寄付……すごい情報量だ。

「とにかく、咲良も誰派か決めてみてよ！ 推しがいたほうが、学校生活も楽しくなる

じゃん」

「お、推しって……」

たしかに、十倉兄弟の話はすごいと思う。有名人とこれから同じ空間で過ごすことになるのも、ちよつとソワソワしちゃう。

でも……

『大人っぽい』

さつき一羽ちゃんが発したワードで、私が瞬時に思い出したのは、お店に来て私のマフィンを褒めてくれた男の子のことだった。……彼と同じ学校だったら、もつとよかったな……そんなことを思っている、

「うわさをすれば！」

一羽ちゃんの声が耳に届いて、彼女の視線の先を辿った。

え……あれって……

赤月くんや黄金くんとは違って、女の子たちに囲まれた廊下を無表情で歩く男の子の姿。それを見て、トクンと胸が鳴った。

あの日見たのと同じ。

清潔感のある黒髪。きれいな鼻筋に薄い唇。それからシャープな輪郭。

間違いない。彼は、私のマフィンを褒めてくれた――

バチツ。

あまりにもじつと見ていたせい、彼の素敵なアーモンドアイとしつかり視線が交わった。

ドクン、とさらに大きく心臓が鳴ったときだった。

歩いてくる彼が、私にベコツと会釈したのだ。

そして、すれ違いざま、ふつと口角を上げて、やわらかくほほえんだ。

あの日と……同じ笑顔だ。

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょ、なに今の！ 今、黒音くん、咲良のこと見て笑ってなかった!? 完全にこつち見てたよね！」

私よりも大騒ぎな一羽ちゃん、初対面だというのに私の肩をバシバシ叩いて大興奮。まさか、あのお客さんが、十倉兄弟のひとり、**十倉黒音くん**だなんて。

これから、同じ校舎で過ごせるんだ！

彼と知り合いだったことは、なんとなく秘密にしておく、一羽ちゃんには言わなかった。いろんな衝撃を受けながら、中学校初日を終えた。

五つ子の秘密

翌日の放課後。

「じゃあね、咲良ちゃん！ クッキーありがとう！」

「甘井さんのお店にも絶対行く！」

席で日誌を記入していると、クラスメイトの女の子たちが私に手を振りながらその声をかけてきた。

「こちらこそ、もらってくれてありがとう。いつかみんな来てね！」

私も「またあした！」と手を振ると、もう教室にはほとんど人がいなくなっていた。

クッキー、喜んでもらえてよかった。

きのうの夜、クラスの女の子たちにあげようと思って準備していたクッキー。

一羽ちゃんにも帰り際に渡したかったんだけど、ピアノのレッスンがあるって急いで教室を出ていったので、渡しそびれてしまった。

「一羽ちゃんにはまた今度、好きな味を聞いて作ろう。」

「そういえば……」

今日、黒音くんのこと見てないな……

同じ学校だと会える機会が増えるって思ってたけど、この学校はひと学年、六クラスもあるし、すれ違うのも難しいみたい。

って……ほんと、気づけば黒音くんのことばかり。一度話しただけなのに。

「お、ちゃんとやってるな、甘井」

「先生！」

突然、ドアのほうから声がしたので顔を上げると、担任の岸本先生がひよこつと顔を出していた。

それからなぜか意味深に笑って、私の机の隣にプリントの束を三つに分けて置いた。

「甘井、本当に申し訳ないんだけど、これ、三枚重ねてホチキスで止めてくれないか？ このあと予定があるなら無理には言わないんだけど……この資料、あした使うのが急ぎよ決まってるさー」

腕時計に目を向ける先生は、すぐく忙しそうだった。

「大丈夫ですよ！ やっておきます！」

「本当か！ 助かるよ。終わったら職員室に持ってきてくれるか」

「分かりました！」

「よし。頼んだ」

先生は早口でそう言つて、すぐに教室をあとにした。

「これで最後！ できたく！」

最後の束を机に置いて、グーッと伸びをする。

なんだか、お店のオープン前にたくさんチラシやシヨップカードを作ったことを思い出す。

よし、これを先生に渡したあとは、帰つてお店のお手伝いだ！ と気合を入れて席を立つ。

カバンを肩にかけて、日誌とプリントの束を腕に抱える。

「うつ……」

これ……結構バランス保つのが難しいかも。

新しい教科書や資料が入っているカバンが、思ったよりも重い。

「行くぞー！」

とさらに気合を入れて、私は教室を出た。

えつと……職員室つてどこだっけ……たしか、一階……ここは三階……

何度もカバンを肩にかけ直し、なんとか階段をゆつくり下りて、踊り場まであと一段と

いうときだった。

一番上のプリントがスーツと傾きだし、それを直そうと体勢を少し変えた瞬間、肩にか

けていたカバンの重みで重心がずれ、そこからはあつという間だった。

幸い、私が転ぶことはなかったけれど、日誌とプリントが盛大に床に散らばってしまった。

うう……最悪だ……

ちよつと泣きそうになりながらプリントを集めていると、背後から足音が聞こえた。

どんくさいところを誰かに見られてしまう！ 急いで拾っている、階段を駆け下りてくる音がした。

「それ、全部ひとりで持つのは無理でしょ」

頭上から降ってきた聞き覚えのある声に顔を上げると、整った顔が私を見下ろしていた。
……嘘。

きのうぶりの黒音くんが、数枚プリントを持って立っていた。

「あつ……」

黒音くんも私に気づいたように、目を見開く。

「あ、拾ってくれてありがとうごさいました！ 助かりました！」

そう言つてプリントを受け取ろうと手を伸ばした瞬間、プリントがひょいっと上に持ち上げられた。

「え……」

「こつちは俺が持つから」

黒音くんは私の腕のなかにあつたプリントも奪つた。

「そんな、悪いよ」

「マフィンのお礼」

続けて「これ、職員室でいいの？」と聞きながら、一階へと続く階段を下りていった。

「ありがとう、黒音くん！ほんと助かりました！」

一緒に職員室を出て、あらためてお礼を言う。

「いや……ていうか、俺の名前知っているんだ？」

黒音くんにそう聞かれて、「あつ」と口元に手を当てる。

「なれなれしくごめんなさい！みんながそう呼んでいたからつい……」

「いや、いいよ。五つ子なんて目立つしね」

そう話す黒音くんの目が、なんだか寂しそうに見えたのは気のせいだろうか。

「じゃ、またね」

黒音くんはくるつと背を向けて歩き出した。

そのうしろ姿を見て、私のマフィンを食べてほえんでくれたのを思い出し、ふと、一羽ちゃんに渡すはずだったクッキーが頭に浮かんだ。

「あの！」

彼の背中に声をかけると、すぐに振り向いた。

「クッキー！ 食べませんか！」

「え……」

「あ、えつと、クラスの友達に渡すつもりだったんですけど、タイミング逃してしまいました。黒音くん、この間、私の作ったマフィンをおいしかったって言ってくれたから、もしよかったらと思って。プリント、一緒に運んでくれたお礼です！」

緊張して早口になってしまったけど、話し終えてから、**迷惑かも！** なんて考えがよぎる。

「はっ、急にそんなこと言われても困りますよね！ その……」

「食べる」

「へ……」

「きみの作るスイーツ。食べたい」

彼が笑顔でそう言ってくれたので、ホッと胸をなでおろす。

よかった……

私は、カバンからラッピングしたクッキーを取り出して、彼に差し出した。

「お口にあれば、いいけど……」

「まだ時間大丈夫？」

「え……時間？」

「これ、一緒に食べようよ」

黒音くんに連れられてやってきたのは、昇降口近くにあるフリースペース。

丸テーブルとイスがカフェのように並んでいて、隣には**自販機**が五台設置されている。

休憩はもちろん、お昼を食べたり勉強もで



きたりする場所だ。

「そういえば、名前聞いていなかった」

「あ、えつと、一年一組の甘井咲良って言います！」

「甘井……咲良……そのまんまだな」

そのまんま……？ 首を傾げると、黒音くんはほほえんで、自販機に向かった。

「咲良はなに飲む？」

「えっ!？」

突然の名前呼びに戸惑いつつ彼を見ると、自販機のボタンを押して電子パネルにスマホをかざしていた。

ガタンつと落ちてきた飲み物を黒音くんが取り上げる。

……ココアだ。

黒音くんって、甘党なのかな……ってそうじゃなくて！

「好きな選んで」

「いや、大丈夫だよ」

「いいから」

お礼がしたくてクッキーをあげようって思ったのに……

私がなにか言うまで動く気のなさそうな黒音くんに負けて、私は遠慮がちに、「アイスティーで」と伝えた。

先ほどと同じようにスマートに飲み物を買った黒音くんが、私にアイスティーを差し出す。

「ありがとう。いただきます」

両手でそれを受け取ると、黒音くんはイスを引いて、私に座るようにうながした。することが全部、紳士すぎるよ。

「し、失礼します」

そう言ってイスに腰かけると、黒音くんも私の斜向かいに座る。

そして「いただきます」と言っつて、ラッピングを解き、中から一枚クッキーを取り出した。

「お、桜だ」

黒音くんが薄いピンクの桜の形をしたクッキーを見つめ、一枚口に放り込むと、サクサクとわずかに音が聞こえてくる。

「いちご味か……うま……」

と黒音くんがかみしめるようにつぶやいたので、ホッと胸が温くなる。

「よかったあ……」

「やっぱり、すごいな……咲良の作るスイーツは」

そう言って、黒音くんは優しくほほえんだ。

大切な思い出、黒音side

春休みのあの日。

引越してきたばかりの場所で見つけた、こぢんまりしたカフェ。

そこでマフィンを食べ、昔の幸せだった記憶を思い出した。

今までの俺なら、手作りのクッキーなんて断ってさつさと帰るのに。

そもそも、誰かが落としたプリントを拾っても、半分持つなんてしない。

彼女……咲良と目が合って、まるで体中に電流が走ったかのような衝撃だった。

まさか、同じ学年の女の子だったなんて。

咲良からクッキーの話をされたとき、自分でもびっくりするぐらい即答した。

また彼女の作るスイーツが食べたかった。

クッキーを食べると、マフィンのときの感動がよみがえった。

そして確信した。

咲良の作るスイーツには、**食べた人の心を温かくする力**がある、と。

「へー、あのカフェ、咲良の自宅とつながっているんだ」

「そう。物心ついたときからうちがカフェだったから、お客さんはほとんど親戚みたいな感じで」

そう話す咲良を、うらやましく感じた。

甘い香りに包まれながら、気心の知れたお客さんに囲まれ、家族でカフェを営んでいるなんて。

「あー、だから居心地よかったのかな。アイスカフェラテも咲良の作ったマフィンももちろん最高にうまかったけど。すぐく作業がはかどった」

「そう言えば、黒音くん、集中してがんばっていたよね。私は勉強が大の苦手だから、あんなふうに机に向かってコツコツ取りかかれる人、尊敬するよ」

「そう？ スイーツ作りも集中力いるでしょ？ それに、あれ、勉強してたんじゃないよ」

家族以外に話したことの無い秘密を、どうしてか咲良にはペラペラと話してしまう。

「イラストを描いてたんだ」

「イラスト？」

「趣味でね」

「え！」

咲良が目キラキラさせながらこつちを見ている。

「黒音くんのイラスト……！ どんなの描くの!?」

まるで、見せてほしいと言わんばかりの無邪気な表情に、トクンと胸が鳴る。

「えつと……」

俺は、カバンの中から愛用しているタブレットを取り出して、イラストを保存しているファイルを開く。

「こういうの」

誰かにイラストを見せるなんて。

自分自身の行動に自分が一番驚いている。

「うわぁ……！！ すっごく上手」

俺おれの描かいたイラストを生きいきとした瞳ひとみで見みつめる咲良さくら。

「こんなうまいなんて、趣味しゅみの範囲はんいを超こえているよ……」

「いや……そんなことないけど……」

イラストをのせる用ようのSNSエスエヌエスでは、よく褒ほめてもらえるけど。

こんなふうに直接ちよくぜつイラストを褒ほめられたことなんてなくて、なんだか照てれくさい。

咲良さくらは画面がめんを食くい入いるように見みては、スクロールするたびに「わあ!」とか「素敵すてき!」と声こえをあげる。

「このイラスト……とつても温あたたかいね」

咲良さくらが、ある一つひとつのイラストを見みてつぶやいた。

「もしかして、黒音くおんさんと兄弟きょうだいのみんな?」

「……うん。ずっと昔むかしの思い出」

あのころの記憶きおくがゆつくりと思おもい出だされる。

以前いぜん住すんでいた家いえには、広ひろい庭にわがあつた。

その隅すみつこには、ガゼボという、アーチ型がたの屋根やねがついたテーブルベンチがあつた。白しろ

を基調きちょうとしていて、まるでおとき話はなしから出でてきたみたいな建物たてもの。

まだ母かあさんが生きていたころ、俺おれたち五つ子いっつこはよくその場所ばしょで母かあさんの手て作りつくしたスイーツを食たべながらティータイムを楽たのしんでいた。

あのころが……一番幸さいわいせだった。

「俺おれたちがまだ小学校しょうがっこうに上あがる前まえの話はなし。白斗はくとが、いつか母かあさんのスイーツを出だすカフェをみんなで開ひらきたいって言いい出だしたんだ。それから母かあさんが亡なくなって、その願ねがいは叶かなわなくなつただけ……今は兄弟きょうだいみんなバラバラだし、咲良さくらんちがカフェしているのを、うらやましいって思おもつてさ……」

「そうだったんだ。……今はバラバラって?」

「……俺おれたち、実は仲なかが悪わるいんだよね。昔むかし、いろいろあつてさ」

「そっか……」

静しずかに俺おれの話はなしを聞きいていた咲良さくらにふと視線しせんを向むけて、話はなしすぎたと我われに返かえる。

「あ、ごめん。こんな話はなし……不思議ふしぎだな。咲良さくらの作つくるスイーツを食たべたらなつかしい気持きもちちになつてペラペラと……」

「……叶えようよ！」

「えっ」

まっすぐな目で声を発した咲良に、言葉が詰まる。
今、なんて言った？ 叶える？

「どうすればいいか全然わかんないけど、十倉兄弟の夢、一緒に叶えよう！」

「叶えるって……あいつらはもう、あのころのことなんて忘れていると思うし……」

「みんなの気持ちじゃなくて、まずは黒音くんの気持ちだよ！
強い気持ちが原動力になるんだから！」

咲良の芯のある声にハツとする。

「俺の気持ち……俺は……」

こんなこと、はじめて口にする。

心の奥底で、わずかに灯っていた俺の夢。

「みんなと、カフェを開きたい」

「うんっ！」

俺の言葉を聞いて、咲良がにっこりと笑う。

「でも、どうするの？」

「それを今から一緒に考えるの！」

こうして、俺と咲良の**作戦会議**がはじまった。



カフェ部大作戦

カランコロン――

小さなドアベルが鳴り、家のカフェに入ると、コーヒーのいい香りが鼻をくすぐる。

「おかえり、咲良」

「咲良ちゃん、おかえり。お、さつそくボーイフレンドかね」

レジに立っていたママのすぐ隣には、カウンター席に座っている常連の賢三さん。

「もう、賢三さん、違うよ！ ごめんね、黒音くん」

黒音くんに気づくなり、賢三さんが冷やかすように言うので、はつきり否定してママを見る。

「ママ、今から黒音くんと大事な話があるから、向こうのテーブル借りるね。お客さん増えてきたらお店手伝うから！」

黒音くん先に席へ座るようにうながしてから、レジのうしろから自分の部屋へと向

かった。

「おまたせ！」

部屋からあるものを持ってお店に戻った私は、黒音くんの待っている席に座る。

テーブルには、ママが用意してくれたらしいカフェラテがふたつ置かれていた。

カフェラテをひと口飲んだ黒音くんが、わずかにホッとしたような表情をする。

一羽ちゃんは、黒音くんのことをクールで一匹オオカミだと言っていたけれど、私にはそんなふうには見えない。

「……ノート？」

黒音くんが、私が手に持っているものに気づいた。

「そう！ かわいすぎてずっと使えなかったノート。ついにこれを使うときが来たよ！」

パフェやケーキ、たくさんのスイーツが描かれたノート。

その表紙に、マジックペンでいねいに文字を書く。

《カフェ部計画ノート♡》

「……カフェ部」

私の字を見て、黒音くんがつぶやく。

「外でちゃんとカフェを経営するのは、未成年の私たちじゃ、あまり現実的じゃないかと思つて。それなら、学校にカフェ部を作つて、生徒のためにもなるような活動をするのはどうかかな？」

「部活か……その発想はなかった。うん。すごいいいと思う」

「ねっ！ うまくいったら、学校の外でも休日限定でカフェをオープンなんてこともできそうだし！」

「なるほど……」

黒音くんと話しながら、どんどんアイデアが浮かんできてワクワクする。

カフェ部。もしそれが現実になつたら最高だつて思う。

うちのカフェのような、お客さんが**ホッと一息つける場所**が学校にもあつたら、学校に

来るのがもつと楽しくなるに決まつている。

「でも……新しい部活を立ち上げるには、**理事長**からの許可が必要だね。**条件**が結構あつた気がするし」

黒音くんの冷静で現実的な意見を聞いて、ハツとする。

「……だよね。でも、黒音くんの願いなら、理事長も聞いてくれるんじゃないかな」

私は、黒音くんが御曹司で、十倉財閥が学校に多額の寄付をしているというわさを思い出してそう言う。

「ん？ どうだろう」

「とにかく！ 聞くだけ聞いてみよう！ あしたさっそく理事長に直談判しに行こう！」
私は、ノートにササッと書き込んだ。

《やるべきこと》

①理事長からカフェ部を作る許可をもらう

翌日のお昼休み。



私と黒音くんは、重厚感のあるドアの前に立っていた。
「咲良……本当に理事長に話すの？」

「うんっ、もちろんっ！」

と答えるけど、実際、私もかなり緊張している。

でも、ここでも行動しないでしたら、もつたないと思うから。

私はゴクツと喉を鳴らして、ドアをノックした。

コンコンツと低めの音が響いて、中から「はい」と落ち着いた声がした。

「じ、失礼します！」

私の代わりにドアを開けてくれたのは黒音くん。

ふたりに中に入ると、デスクのうしろにある窓ガラスの前に立っていた理事長がこちら

を向いた。

「おお、誰かと思えば、黒音くんじゃないか。お隣は——」

「えっと、一年の甘井咲良と申します！ 新学期がはじまったばかりのお忙しいところ

すみません。実は、この愛ノ花学園に新しく《カフェ部》を作りたいと考えていまして

……」

理事長は少しの間を置いて、ゆつくりとこちらへ歩み寄る。

「カフェ部……とは具体的に、どんな活動をするのかね。黒音くん」

「生徒たちの憩いの場が作れたら。咲良……甘井さんの家がカフェを経営しているの

ですが、居心地がよくて、素敵な場所なんです。この学校にもそんな場所があったら、生

徒たちに寄り添う居場所ができるんじゃないかって……」

「なるほど。たしかに、もしそんな場所が実現できたら素敵だ」

黒音くんの説明を聞いてニコツとほえんだ理事長を見て、ホツとする。

「……それじゃあ！」

「黒音くん。十倉財閥からの寄付には本当に感謝しているよ。キミたち兄弟の要望にはで

きるだけ応えたい。しかし、さすがにいくらなんでもキミひとりだけの意見で部活を新し

く作るの……ね」

ひとりだけ……一応、私もいるんだけど……

「それって、ほかの兄弟が部員になるなら、協力してくれるってことですか？」